

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(小学校用)

都道府県名	山 口 県
-------	-------

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	長門市立深川小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	3	3	3	21	30
児童数	113	106	103	106	116	120	4	668	

研究の概要

1. 研究主題

生き生きと学ぶ子どもたちの育成 ~算数を楽しむ子どもをめざして~
-------------------------------------

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

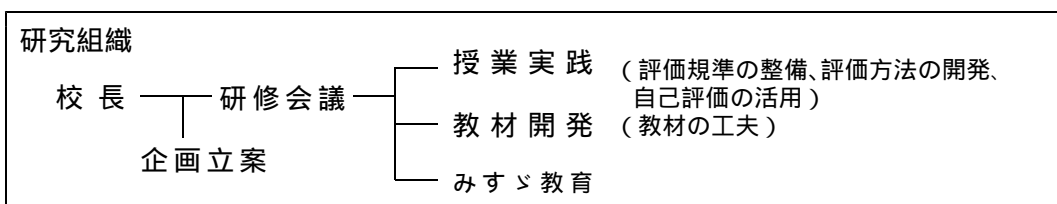
1～6年生・算数 算数は、系統性の強い教科であることから、基礎・基本の確実な定着を図っていくため。
--

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	テーマ 評価を生かした授業展開の工夫 研究の見通し 評価を生かし、個に応じた指導や、学習の特性に応じた少人数指導を行うことにより、基礎・基本の定着を図ることができ、わかる喜びを味わわせることができるのではないかと。 研究の内容・方法 ・内容 評価規準の効果的活用 評価方法の開発 教材の工夫と活用 自己評価の活用 ・方法 4つの視点から、具体的な取組を行い、授業実践をとおして検証する。
--------	--

平成16年度	テーマ 評価を生かした授業展開の工夫 研究の見通し 評価を生かし、個に応じた指導や、学習の特性に応じた少人数指導を行うことにより、基礎・基本の定着を図ることができ、わかる喜びを味わわせることができるのではないかと。 研究の内容・方法 ・内容 実践に生かすことができる評価規準への改善 評価方法の工夫 思考・判断する力を育てる教材の開発 客観的に自己評価をする力の育成 ・方法 授業実践をとおして、より実用的な評価方法を追求する。
--------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 評価を生かした授業展開例 - 第3学年算数「かけ算(2)」 -

評価を生かした作為2分割による少人数学級編成

12×3の計算方法を考える段階で、5通りの考え方がでてきた。そこで、5通りの考え方がすべて含まれているように学級を2分割した。

<第1次1/7 N児が示した「12」の分け方>

かけ算(2) ワークシート①

12×3のしかたを考えよう。  
12を2つの数にわけて計算しよう。

① 12をどんな2つの数にわけたらいいかを考えよう。

① 12を3と9にわける

$$\begin{array}{l} 12 \times 3 \\ 3 \times 3 = 9 \\ 9 \times 3 = 27 \\ 9 + 27 = 36 \end{array}$$

② ほかのわけかたでもやってみよう。

12を4と8にわける

$$\begin{array}{l} 12 \times 3 \\ 4 \times 3 = 12 \\ 8 \times 3 = 24 \\ 12 + 24 = 36 \end{array}$$

③ ほかにわけたかたがある人ほうらに書いてください。

$$\begin{array}{l} 12 \times 3 \\ 6 \times 3 = 18 \\ 6 \times 3 = 18 \\ 18 + 18 = 36 \\ 12を5と7でわける。 \\ 12 \times 3 \\ 5 \times 3 = 15 \\ 7 \times 3 = 21 \\ 15 + 21 = 36 \end{array}$$

<第1次2/7 2分割した学級の座席表>

**取組方法**  
(参考資料) 座席表 場所 レクチャー2  
単元 かけ算(2)  
名前 (①既習のかけ算が不十分、②集中力に配慮が必要)・前時の学習で12をどう分けて計算しているか。

教壇							
U① ・10と2	T ・10と2	K ・6と6	M ・5と7	O① ・5と7	N ・6と6	K① ・6と6	F ・10と2
F ・4と8	M ・10と2	I ・10と2	O ・10と2	O② ・4と8	O ・10と2	M ・10と2	N ・3と9

評価規準の効果的活用

A 規準の判定と C 規準への支援を明確にした評価規準を作成し、授業において活用した。

単元の評価規準 (知識・理解)	2 位数や 3 位数に 1 位数をかける乗法の計算の仕方を理解している。
評価規準の具体化 (B 規準)	2 位数 × 1 位数 (繰り上がりのない場合) の計算の仕方を理解している。
主眼	12 × 3 のよりよい計算方法を話し合う活動を通して、かけられる数を何十と 1 位数に分けて計算する仕方がわかるようにする。
A 規準の明確化と C 規準の児童への 支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ A 規準・・・数を分解し、部分積の和による 2 位数 × 1 位数の計算の手順を書くことができる。</li> <li>・ C 規準・・・位のまとまりで数を分解し、部分積とその和を求めることを助言する。</li> </ul>

教材の工夫と活用

ひとり学びや評価を支えるワークシートを作成し、活用する。

< N 児のワークシート >

かけ算 (2) ワークシート②

名前 \_\_\_\_\_

はやく、かんたんに、どんな数でもできる計算のしかたを見つけよう。

◎ 自分の計算のしかたでもういちど計算したり、友達に計算のしかたで自分がいいと思うものを計算してみたりしよう。

計算してみよう		かめこ・あかこ・まこ・まこ
12 × 3 ⑤⑦	5 × 3 = 15 7 × 3 = 21 15 + 21 = 36	答えは、15、21 の答えをたして 36。
12 × 3 ⑩②	10 × 3 = 30 2 × 3 = 6 30 + 6 = 36	たした答えが 12 × 3 の答え。
12 × 3 ⑥⑥	6 × 3 = 18 6 × 3 = 18 18 + 18 = 36	6 × 3 のと 6 × 3 たすかんたん

◎ どの計算のしかたがよかったですか。12 を 10 と 2 でわける計算のしかた

\*わけ\*

12 を 10 と 2 にわけるです。さうこのたし算の時 30 と 6 をたす。

自分の計算のしかたをみんなに紹介しよう。

かけ算 (2) きぞ①

名前 \_\_\_\_\_

1 12 × 4 = 48

① ⑩②  
⑩ × 4 = 40  
② × 4 = 8  
40 + 8 = 48

2 24 × 2

① ○ ○ × 2 =  
② ○ ○ × 2 =  
③ ○ + ○ =

3 32 × 3

① ○ ○  
② <  
③

◎ ヒントだよーん♡

22 × 3

① ⑩② ← ⑩をわける  
② ⑩ × 3 = 30 ← ⑩かける  
③ ② × 3 = 6 ← ②かける  
④ 30 + 6 = 36 ← たす

N 児のふり返しカードによる自己評価

算数ふり返しカード

単元名 かけ算 2 (3) 年 (2) 組 名前 \_\_\_\_\_

時数	月/日	グループ	楽しかったか?	わかったか?	ひと言感想
1	11/10	全・半・希	◎	◎	少しむずかしいと思ったけど楽しかった。
2	11/13	全・半・希	◎	◎	はじめはむずかしかったけどよくわかってきた。
3	11/19	全・半・希	◎	◎	11月よりよくくりあがりのところがわかった。
4	11/25	全・半・希	◎	◎	11月もみんなだいたいよかったのしい。
5	11/27	全・半・希	◎	◎	ちょっとくらいかえってむずかしいけど楽しい。
6	12/1	全・半・希	◎	◎	くりあがりがかえってむずかしい気がするけどみんな。

授業を終えて

N児の学習の様子を見てみると、第1次の1時間目には、12を3と9に分けていたが、学習を進めていくと10と2に分けるよさに気づき、筆算の仕方を理解していったことがわかる。ふり返しカードからも、N児の学習への意欲の高まりを感じることができる。

その他の授業者の感想としては、次のようなものがあった。

- ・ 学級を2分割することで個に対応することができた。一人一人の子どもの学習活動の状況を把握して、一人一人に応じたかかわり方ができた。
- ・ 小集団で学習をしたことで生き生きと学習できた子どもがいた。
- ・ 評価規準を授業に活用したこと、評価の観点を決めたことで、評価が容易にできた。しかし、その時間だけでは理解させることができなかった子どももあり、評価するだけでなく、教師の指導力を高める必要もあると感じる。
- ・ C規準の子どもに関わる時間が確保できた。

(2) 算数への意識と評価の推移

対象学年 3～6年の子ども  
 実施時期 学年当初と2学期末  
 調査方法

・ 算数への意識

「算数は、好きですか。」という質問に、「好き・どちらかというとしき・どちらかというときらい・きらい」の中から答える。

・ 評価

昨年度の学年末評価と今年度の2学期末の評価を比較する。

その際、Aを3点、Bを2点、Cを1点として数値化する。

学年当初と2学期末の算数への意識と評価の推移

	意識向上	意識変化なし	意識下降	合計
評価向上	73人 17%	112人 27%	49人 12%	234人 56%
評価変化なし	28人 7%	47人 11%	24人 5%	99人 23%
評価下降	17人 4%	40人 10%	29人 7%	86人 21%
合計	118人 28%	199人 48%	102人 24%	419人 100%

考察

- ・ 評価が向上した児童が56%おり、このことは、少人数指導を含めた本校の取組の一定の成果を示しているものではなからうか。
- ・ 意識の変化に目を向けてみると、変化なしが約半数を占めている。また、向上した者、下降した者の人数もほぼ同数である。このことから本校の取組は、児童の算数への意識にあまり影響を与えていないように思われる。

## 2. 今後の課題

**学校、児童の実態にあった評価規準への見直し**  
的確に評価し、その評価を個に応じた指導に生かすためには、児童の実態にあった、実践に生かすことができる評価規準へ改善していく必要がある。

**評価方法の工夫**  
子ども全員を評価することができ、子どもの関心や意欲をつかむことができるように評価方法を工夫する必要がある。

**思考・判断する力を育てる教材の開発**  
授業で使用するワークシートや繰り返し練習に使用するプリントなどにおいて、思考力や判断力を育てる内容を盛り込む必要がある。

**客観的に自己評価する力の育成**  
授業評価の適切な観点を設定することや、主体的に自分の学びをつくり、自分を高めていくために、客観的に自己評価する力を育てる必要がある。

### 学力等把握のための学校としての取組

**授業終了後のふり返しカードによる自己評価**  
児童の授業への理解の程度や関心などを把握することで、授業改善の一助にする。

**学年初めや学期末に算数への意識を調査**  
変容を把握することで、児童理解や授業改善の一助にする。

**学年末計算マスターチェック**  
計算練習を繰り返し行い定着を図るとともに、定着しにくい計算を把握し、今後の指導に役立てる。

**単元末のテストの結果を集積**  
学年別、領域別等の平均点の推移を見ることで児童の実態と変容を把握し、授業改善の一助とする。

### フロンティアスクールとしての研究成果の普及

(1) 校内研修会  
平成15年10月22日(水) 授業研究2年算数「かけ算(1)」 本校教職員及び3名他校から参加  
平成15年11月13日(木) 授業研究3年算数「かけ算(2)」 本校教職員及び6名他校から参加  
平成16年2月4日(水) 授業研究5年算数「割合とグラフ」 本校教職員及び12名他校から参加

(2) 管内地区別協議会において、深川小学校の取組を発表  
(3) 集録の作成・配布  
(4) ホームページの作成

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】  15年度からの新規校  14年度からの継続校

【学校規模】  6学級以下  7～12学級  
 13～18学級  19～24学級  
 25学級以上

【指導体制】  少人数指導  T・Tによる指導  
 一部教科担任制  その他

【研究教科】  国語  社会  算数  理科  
 生活  音楽  図画工作  家庭  
 体育  その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】  有  無